



巻 頭 言

再考グローバル化 (Globalization)

日本曹達株式会社 農業化学品事業部
農業化学品開発グループ グループリーダー

水野 晶巳

フロリダ州の空港ロビーでこの原稿を書いている。安全チェックの厳しさとは反対に米国人は昔より静かで落ち着いている。そして日本で苛ついていた私自身まで妙に落ち着いている。何がそんなに変わったのであろうか？

最近、私はグローバル化とそれに対する意識の低さ、無策に非常に焦りを感じていた。去る2月24日に放映されたNHKスペシャル「世界はどこへ向かうのか？ 問われるグローバル化」は私の焦りを整理させてくれた優れた番組であった。

グローバル化に定義があるとしたら「(金融)市場原理の導入・徹底」らしい。ところがこのグローバル化とは結局米国だけがメリットを得る仕組みになっているようだ。グローバル化が唱えられ始めてから各国の経済危機(タイ/1997, ロシア/1998, ブラジル/1999, アルゼンチン/2000-2001)が始まり日本も被害を受けていると考えてよい。低開発諸国がひどい目に遭っている事に対しNGOグループがすぎましい抗議行動を起こしそして日本にも火の粉が降りかかってきて初めてノンビリ日本人も気が付いてきたのである。

そして9月11日のあのテロ事件以後、米国人でさえ自国発信のグローバル化に疑問を持ち、公正さへの模索を始めてきている。GMOだけでなく感度の高い政府関係者も発言を始めている。「貧困がテロの申し子になっている(フィリピン/アロヨ大統領)」, 「経済運営に少しの間違い

も出来ない(タイ/スパチャイ元副首相)」等々。しかし大勢はアナン国連事務総長のように「グローバル化が原因ではない。経済原理は必要である。これが貧困を救える。」からまだまだ脱却できないのも事実である。

農業分野で今まで進められてきた受身的対外政策、GMO食品ラベル化問題、生鮮野菜の輸入急増問題などはグローバル化の圧力と見てよいだろう。日本独特の食文化、食品の安全性を日本独自のスケールで判断し始める時期ではないだろうか？

世界はグローバル化からマイクロ化へ動き始めている。「小さくなる」とか「孤立する」とかでなく“自分達のために、自分達のスケールで、社会のために活動する”ことである。

バングラデッシュから始まり今や低開発諸国80カ国に拡大した「マイクロクレジット」が代表であり、ここでの活動家を“社会的起業家”と呼んでいる。このバングラデッシュのグラミン銀行総裁ユヌス氏はこのたびこの活動が認められ世界的な表彰を受けている。日本でも早く“社会的起業家”を育て、認めて行かなければならない。

今、私が米国で妙に感じている変化は、『私自身のみが焦燥に駆られているのではなく、世界の人々が同じように感じ始めている』ということを目の前で見、体で感じているものから来ているらしい。